



ようにさっと車を降りて「最近聴いてる曲の歌詞と一緒にだー」とぐんぐん畑に近づいていく（aikō「ある日のひまわり」）。炎天下、涼しげな水色のポロシャツが汗でくたたと変色するまで夢中で写真を撮り続け、下を向くひまわりに当然のごとく視線を合わせる後ろ姿はとてつもなく輝いていて、少し遠まきの日陰からそれを見ていた私は不意に振り向いたゆっつきゅんに「なんでそんなに笑ってるの!？」とウケられるほど愉快な気分であふれていた。

二週間後、山口への旅では初日にYCAMでの爆音『BAUS 映画から船出した映画館』と伝説の「女将劇場」を同日に体験できたことがやはり印象的だった。荒波に揉まれながらも、本気で「ぶざける」をやっていくということ。かつてジミヘンの生まれ変わりと称されたのだという女将にサインをもらった友人の砂田くんは、酔っ払った夜道でふいに不安そうな表情になり、リュックをがさごそと漁って、自分が色紙を失くしていない事がわかるとようやく安堵した表情で宿泊先の漫喫へと帰っていった。次の日の昼、YCAMと同じ磯崎新建築の秋吉台国際芸術村に向かうため、バ

スが来る時間をホテルのロビーで待っていると、サングラスをかけた五十代くらいの男が誰かとの電話で「もういっぺん言ってみい、ぶち殺すぞ!」と声を張り上げる。横の席でうたた寝していたお婆さんとのコントラストも相まってありえない場に立ち会った感がある。翌日に秋芳洞という観光名所に立ち寄って見たら、お土産屋さんの軒先に「ぶちうまつ! ぜんざい」と書かれた張り紙があつて、ぶち殺すの「ぶち」は方言だったのだと静かに合点。他にも湯田温泉の街角で、種田山頭火の言葉が彫られた石碑に目を凝らしたら、一言目に「ちんぼこ」と書かれていたことなど感動した。大の大人がお金を集めて、会議して、公共の場にこんな言葉を刻むなんて。

振り返ってみると、自分は旅の時間の中でも、特に「びっくり」を感じる瞬間に強く惹かれていたことがわかった。出発前は事前に細かくプランを立てないと安心できない性格でもあるけれど、家に帰ってくると結局、自分の想像をべろんと一枚めくられた瞬間のことが思い出される。敬愛するジョナス・メカスが日本への旅について「冒険であり、エデュケーション」と表現している記事があつたけど、なにかに驚くと脳内にばこつと無垢なスペースが生まれて、そこに新しい知識や感情が疑いもなく張り付いてくれる感覚がある。

GINZAZAチームで関わったシンガポールでの上映会や、大規模な反政府デモと時期が重なったインドネシアへの旅についても触れたかったけれど、文字



数の関係で今回は断念。後者については現地合流した映画作家の川上アチカさん、研究者の新谷和輝さんとZINEにしまとめたいと計画中です。限りある無職期間、まだまだ移動していくぞう!

井戸沼紀美（いどぬま・きみ）
映画上映と執筆を軸にした個人プロジェクト「肌蹴る光線」を二〇一八年に始動。各種メディアへの寄稿や不定期の上映活動続ける。



←「ぱたりラップトップ」の感想はこちらまで